

書 評

 Robin Headlam Wells: *Shakespeare on Masculinity*

Cambridge: Cambridge University Press, 2000. xi+249 pp.

 内藤亮一

昨今“masculinity”といえば、すぐにジェンダー研究でいう「男性的主体」を思いうかべるであろう。本書と同年に出版された Bruce R. Smith による Oxford Shakespeare Topics の一冊 *Shakespeare and Masculinity* も、様々な角度から男性的な主体が構築されることを扱っている。だが本書で著者は“masculinity”という語を、シェイクスピア時代には「軍事的あるいは英雄的特質を意味する」(7) 語としてしばしば使われた“masculine”の意で用いている。著者がわざわざこのような歴史的意味をこの語に持たせたのにはおそらく2つの意図がある。一つは、当時の“masculine”や“manly”(6)といった語は好戦的プロテスタントの政治的立場を表すものであり、そのことが枢密院内部に深い亀裂を引き起こしていたにもかかわらず、この英雄性と政治論争との関わりを、これまでの批評家がシェイクスピア劇の考察対象に十分含めていないというのが本書の出発点だからである。もう一つは、本書が著者の歴史主義的立場を鮮明に表明したものだからである。著者は *Neo-Historicism: Studies in Renaissance Literature, History and Politics* (D. S. Brewer, 2000) の共編者でもあるが、その序での新歴史主義者や文化的唯物論者の歴史主義に対する誤解への反論は、本書のあとがきにも反映されている。さらに、これら

の批評の影響力を考慮してか、著者は各章にこれらの代表的な批評家の解釈を取り上げて、歴史的観点から反駁を試みている。

したがって、著者の本書での関心は、何らかの理論を用いて男性的主体の構築過程を分析することにはなく、あとがきにも書いているように、英雄的男性性に関する当時の対立する見解を述べ、それらの見解が後期エリザベス朝と初期ジェームズ朝における政治論争において果たした役割を示し、それをもとにシェイクスピアの劇を解釈することにある。これについては、政治的文脈との絡みについての様々な知見をもたらしてくれ、さらに徹底的な反カリスマ英雄論を展開する点において、独自の見解を示している。

予想されることだが、本書で扱われる英雄の概念は目新しいものではない。考察の対象となるモデルは、騎士と古代ローマの軍人である。それを好戦的プロテスタントの一派がエセックスとヘンリー皇太子に重ね、反戦主義の市民的人文主義とジェームズとに対立していたという見取り図が、序で簡便にまとめられている。そして両派の外交政策を代表する神話的人物が、ヘラクレスとオルフェウスであり、ヘラクレスは戦争によって和平に至ることを、オルフェウスは雄弁によって和平に至ることを象徴する点が強調される。これらを軸にして、シェイクスピア劇が「英雄的男性性の危険を分析した」(30)ものであることが以下の章で示されることになる。

第1章では『ヘンリー5世』と『トロイラスとクレシダ』が騎士道復活との絡みで論じられる。『ヘンリー5世』執筆当時は、外交政策における好戦派と反対派の対立が緊張に達していた時期であった。好戦派のエセックスのアイルランド遠征が成功するか失敗するかがまだ定かでない時期であり、エセックスの拡張政策や騎士道のモデルとなるヘンリー5世の描き方にはシェイクスピアは慎重にならざるを得なかった。ただ新歴史主義者がいうような、偽善者としてのヘンリーは、テキストにその証拠を見いだせないのであり、ヘンリーの誠実さは疑いの余地がない。むしろ問題は、自らの正義を確信するひたむきな理想主義にあり、シェイクスピアは『ヘンリー5世』でその危険性を暗示していると論じる。

エセックスが失脚し、その告白から、新騎士道の理想が自らの名声だけを気

にする「ごまかし」であることが判明したときに、『トロイラスとクレシダ』は書かれており、ここでは騎士道の英雄的男性性が痛烈に風刺され、男性性と名誉の不合理さが示される。また著者は相対主義を厳しく非難し、普遍的真実を否定し、理性と客観性を西洋帝国主義の道具とみるなら、結果は『トロイラスとクレシダ』にみられる無秩序状態になるとして、代わりにアイザイア・バーリンの「人間の道徳に関する普遍的枠組み」の概念が持ち出される。本書に見られる新しい批評への批判的態度は、著者のこの無政府状態への強い懸念からきているといえる。

第2章では『ハムレット』が論じられ、著者はハムレットとジェームズの生い立ちなど復讐の状況は符合するが、ハムレットに見られるフォーティンbrasなど英雄的男性性への憧れがジェームズとは異なっていたとする。しばしば問題とされるハムレットのフォーティンbrasへの王位継承については、ハムレットにはその政治的意味がわかっておらず、ハムレットは外交政策よりも復讐の英雄的行為に惹きつけられているとする、従来とやや異なるハムレット像を提示する。著者はトロイへの言及やヴァイキングとの関連から、フォーティンbrasの王位継承への不安が劇中に示されていると論じ、エセックスの事例を絡めて、英雄的男性性が政情不安を引き起こしかねないとして、カリスマ的な英雄の危険を説く。

第3章は『オセロ』が論じられる。まず、オセロはもっともヘラクレスと共通するが、シェイクスピアは、セネカの『狂えるヘラクレス』から、「真の英雄的美徳は怒りではなく、自制にある」という「偉大な男性」に対する皮肉な視点を取ったと指摘する。著者は当時の文明対非ヨーロッパの対立論争に言及し、『オセロ』執筆時期がモンテーニュの未開人称賛の英訳とジェームズらの反イスラム神話に重なっていたことから、『オセロ』が当時の論争とどう関わるかを検証する。そして『オセロ』においては、男性の名誉の規範が不貞に対して復讐を認可しており、象徴的レヴェルで英雄と野蛮人が一つになると論じる。最後の演説で、オセロが男性的名誉の規範に彼の行為の正当性を訴えるのに対して、男性が誰も疑問を呈しないのは、英雄的な男性性を是認するからではなく、カリスマ的な英雄性が人々を誘い込む力と、その結果の政情不安への皮肉なコ

メントとも読めるのである。

第4章『マクベス』論では暴君を相手に、暴力が平和のために合法化されるのかという問題が検証される。この問題の難しさは、劇中の様々な「男らしさ」への訴えに示されており、正義と暴力は最後には排他的でなくなり、英雄叙事詩と福音書に基づく2つの対立する男らしさの概念も切り離すことができなくなる。著者は、ジェームズの現実主義的平和政策や王がウェルギリウスのアウグストゥスを理想としたことと、『アエネーイス』に含まれる平和と暴力に関してのあいまいさとを関係づけていき、この劇が英雄的行動で文明を守ろうとする男が、暴力を行使せざるをえないパラドックスを示しているとする。

第5章『コリオレイナス』論は、この劇が政府の外交政策と王室内部の紛争に関わるものという視点から考察される。この劇が書かれた当時、皇太子ヘンリーの軍事的野心が親子に軋轢を引き起こし、双方が戦争論を出版した緊迫した情勢にあった。マーシャスの若さの強調はカリスマ的な若い戦士を観客に想起させ、またローマは拡張政策で知られ、戦場での「男らしさ」を尊敬する社会であった。しかしこの劇は、英雄的軍国主義が人々を対立させ合うことを示している。著者はこの劇で指摘される同性愛的要素を否定し、マーシャスの住む世界は騎士道の友情の世界であるとし、個人の名譽を国家より重んじるマーシャスは、友情が政治的問題であったローマ末期において、「孤独なドラゴン」となると論じる。そしてマーシャスは人文主義が警告した利己的野心や「男らしさ」の崇拜の危険この上ない例であり、『コリオレイナス』は「男らしさと騎士道」が再び人気を集めたときの、最後のもっとも断固とした英雄的価値の弾劾となっていると述べる。

第6章では『テンペスト』が論じられ、ジェームズがオルフェウスの再来として、また音楽家王として称えられるなか、シェイクスピアがこれまでの英雄像とは別のオルフェウスの英雄を描いたと指摘する。著者はプロスペローを島の篡奪者とする、最近の『テンペスト』論に異議を唱え、新歴史主義者が当時の植民地事業への関心を誇大視しているとも指摘する。そしてプロスペローが敵を悔恨させると同時に、自らのヘラクレス的復讐の欲望を征服し、オルフェウスの魔術によって、男性的な美德（力）を定義し直すと述べる。さらに、

ヘンリーとカトリックとの結婚によってヨーロッパの平和を目論むジェームズと、プロテスタントとの結婚で反カトリックの同盟強化を望むヘンリーとの間の軋轢が高まった時期に、この劇の結婚による和平成立のテーマが持つ政治的意味を考察する。

あとがきで著者は、20世紀前半の歴史認識に関する論争を振り返り、歴史主義は決して完全に単一的で客観的な過去を再現できると考えてきたのではなく、新歴史主義や文化的唯物論などが自分たちの歴史認識の新しさを主張することの多くは、過去の学問への無知から生じており、そのため歴史主義という用語に混乱が生じていると批判する。

ただし著者は、歴史主義はあくまで、できる限りの客観性を求めて過去を再現しようとすると考えており、この点からさらに、新歴史主義や文化的唯物論などが過去を現在の代弁者として利用していると非難する。そして彼らの批評を「現代的考え方をする人 (presentist)」(212) のアプローチとし、あらかじめ知っている結論を引き出すためテキストを用いていると批判する。また類推的手法の限界や、直接の関係が証明されない資料に頼ることから、グリーンブラットは反証不可能で歴史主義とはいえないと指摘する (37-38)。なおこの歴史とフィクションの違いや資料の扱いに関しては、歴史家との共著による *Neo-Historicism* の序でさらに論じている。

著者の論理にはときには強引なところがみられ、特に新しい批評を批判するとき、必ずしも常に説得力があるとはいえない。例えば『アエネーイス』が当時の代表的植民地主義テキストであるが、『テンペスト』とテーマが違うので、『テンペスト』は植民地主義と関係ないといわれると、首肯しかねる。しかし難しい理論や用語を振り回すことなく一貫したテーマを、直接関連する資料をもとにわかりやすく論じており、また当時の歴史的事実に関する著者の叙述は明快で、作品論も骨太でコンテキストについて多くを教えてくれる。新旧の批評への言及も多く、その点でも歴史主義の立場からの見方を窺い知るのに絶好な、独自のシェイクスピア英雄論であるといえる。